読書人世界から学者共和国制度へ

――理性を制度化しようとしたカントの試み――

福田喜一郎

はじめに

ドイツ一八世紀の別名は「啓蒙時代」である。啓蒙思想を研究する意義はなにか。それは、制約を受けた精神世界がいかなる態度を示したかを知ることにある。カントはその時代を最も端的に生きた哲学者であり、[1]かつ時代を超えた原理を私たちに提示している。その「啓蒙」というタームは西洋思想史において最も多義的な概念である。そして現在議論されるにあたり悪名として登場することが多いにもかかわらず、カントの啓蒙思想だけは少なくともドイツにおいては最終的な支持を得ていると言われている。[2]その啓蒙思想を論じる際の基本文献である「啓蒙とはなにか？その問いに対する答え」が一七八四年に掲載された『ベルリン月報』は、ドイツ啓蒙を代表するジャーナルであり、いわゆる一八世紀ドイツの「読書人世界(Leserwelt)」を形成する一翼を担っていた。

カントには『ベルリン月報』に見られるような新しい雑誌メディアの流行とは別に、啓蒙思想と絡み合うもう一つ別の文脈があった。論文「啓蒙とはなにか」では自らの時代を「啓蒙の時代」と名付けるだけでなく（ただし、やがて啓蒙の次の時代が到来すると考えられているのではな

い)、「フリードリヒの世紀」とも称している(VIII-40)。それは歴史的には封建国家の最終形態である絶対主義の時代であった。ドイツの大学に共通する領邦大学の性格をもつケーニヒスベルク大学に奉職するカントにとって、国家は「市民(Bürger=politisches Subjekt)」かつプロフェッサーとしてのカントのパトロンであり、当初は彼の哲学的営為の敵対者ではなかった(カントが『純粋理性批判』を文部大臣のツェドリッツに献呈した例を見よ)。

しかしながら、一七九四年に下された勅令は、「読書人世界」に積極的に参画していたカントに深刻な影響を与えざるを得なかった。カントの筆禍事件と、『学部の争い』(一七九八)で展開されている大学論とが密接な関係にあることは、いまさら言うまでもない。「読書人世界」の成員はいわゆる「世界市民」の立場であり、一人の「人間(Mensch)」であったが、大学の学部において形成される「学者共同体(das gelehrte gemeine Wesen)」の成員は制度(Institutionen)の中に保護されながら「公的に」発言する「市民」である。言い換えれば、大学の学者は制度化された理性と見なすことができる。

本稿は、カントの論文「啓蒙とはなにか」と『学部の争い』という異なった時期に書かれた著作を、「読書人世界」から「学者共和国」の形成への動きとして読もうという試みである。そこから高等教育機関である大学問題を基本から考え直す方向性が示されるであろう。

一　ケーニヒスベルクとベルリン

カントが生涯を過ごしたケーニヒスベルク(現カリーニングラード)は当時のドイツの東北僻地に位置していた。啓蒙主義の拠点であるベルリンの人口がカントが生まれた一七二四年に二万五千人であったのに対して、ケーニヒスベルクは人口四万人を誇る国際的大港湾都市であった。[iii] カントはケーニヒスベルクを次のように描いている。「一国の中心をなす大都市で、そこには国の政府諸機関があり、大学があり、さらに海外貿易の要衝を占め、内陸からの河川をも通じて、さまざまの言語や風習をもつ遠近の国々と交易するのに便利であるような都市」(VII-121-122)。

ケーニヒスベルクが特に栄えるようになったのは七年戦

争（一七五六～六三）によるロシアの占領時で、ロシア人将校が大学の行事に参加することで大学の社会的地位も上がることになった。一八世紀半ばには劇場が作られ、書籍販売者、出版業者、週刊誌、新聞が生まれる。一七五九年にはハーマンが戻ってきたり、一七六二年にはヘルダーがカントの学生となったりした。ヘルダーなどは初めてケーニヒスベルクの土地を踏むと、その大都会ぶりに驚嘆した。[四]

確かに、ケーニヒスベルクは東西の要衝地でもあったが、啓蒙思想という運動に目を移すときその文化的活気はかなり見劣りしていると言わざるをえない。まず「啓蒙君主」とも言われたフリードリヒ二世（一七一二～八六）のケーニヒスベルクに関する発言を見てみよう。「この土地には馬がたくさんいて、建物はすばらしく人口も多いが、ものごとを考えさせる存在は何もない。ここに長くいれば、有しているかもしれない僅かの健全な理性もきっと失ってしまうだろう。ここにいるくらいなら死んでしまった方がいい」「ここでは精神の上に物質が支配しているように感じる」「学問現場に仕えるよりは、熊を育てている方がましだ」「私がまちがっていなければ、無駄や退屈がケーニヒスベルクの守護神である」。[五]

確かに規模と兵士の数（ロシア占領時代五千人）ではたいへんな都会であったが、カントが二度にわたって称賛しているフリードリヒ大王にとって、[六]否、それだけでなく一般的にも、ケーニヒスベルクはベルリンと比較された場合その文化的後進性は否めない。外国からの情報の伝達も遅かった。カント自身の著作は啓蒙主義の最果ての地で出版されていたにすぎないのである。

そこでカントが最も内容豊かな文通を行った相手はランベルト（一七二八～一七七七）、ヘルツ（一七四七～一八〇三）、メンデルスゾーン（一七二九～一七八六）などのベルリン学術アカデミーの関係者であった。ちなみにケーニヒスベルク大学は一七世紀以来アリストテレス主義の大学であったが、[七]一八世紀中葉にはそれに対抗するピエティストかつヴォルフ主義者であったシュルツ（一六九二～一七六三）が神学部教授に着任するという状況であった。[八]そうした状況下で、カントはケーニヒスベルクの現実をよそに遥か遠くの都ベルリンに熱い思いを馳せていたと推測で

きる。一七八六年にベルリン学術アカデミーの会員に選ばれると、さっそく翌年の『純粋理性批判』第二版では、ケーニヒスベルク大学プロフェッサーという称号に加えて「ベルリン王立学術アカデミー会員(Mitglied der Königl.Akademie der Wissenschaften in Berlin)」と記している。それは第一版(一七八一)と同様に、ケーニヒスベルクと文化的交流のある、しかしまた辺境の地でもあったリガ市で出版されたのであった。

実は、カントとベルリンとの関係は一七六三年のベルリン学術アカデミーの懸賞論文に遡る。彼は懸賞論文テーマに即して「自然神学と道徳学との原理の判明性の吟味」という論文を提出し、次点となって翌年に出版されている。テーマはヴォルフ主義に関する信仰告白とも解しうる性格のものであるが、それと同時にベルリンへの関わりおよび啓蒙思想への最初のコミットメントとも見なしうる。というのは、懸賞論文というやり方自体が、今日のものとは異なりすでに啓蒙的営みだからである。懸賞論文という形態の思想的意義は、誰もが理性にあずかることができ、私たちはそこにおいて自然に備わった精神能力を開花させればよいという考えに基づいていた。[九]

ベルリンへの独特の憧憬を示す記述は他にもある。カントは一七八四年の一二月にビースターに対して次のように書いている。「読者(Publikum)が解決してほしいと思っているのはどんな問題なのでしょうか。まもなく私は、世間一般の人の趣味に探りを入れるために、これまでとは異なった二つの領域へとそれてゆきます。私はいつもいろいろなことをじっくりと考えていますので、材料の不足はありません」(Immanuel Kants Werke herausgeg. Ernst Cassirer. Bd IX, S. 260)。つまりカントは啓蒙思想の僻地にいながら、啓蒙のメッカであるベルリンの流行思想を追っているのである。それにしても、カントは自信たっぷりの口調だ。

一七八七年の一二月にカール・レオンハルト・ラインホルト(イェーナ大学教授)に宛てた手紙などでは、今度は学者世界への思いを記している。「もしあなたのお時間が許すなら、ときおり学者世界(die Gelehrten-Welt)からの新しい情報を幾ばくかお知らせ願ってもよろしいでしょうか。私たちはこちらでは、その世界からかなり隔たった所

におります。こちらの世界には、政治的世界とまったく同じように戦争や同盟や陰謀等があります。確かに私はその活動に参与できませんし、参与したくもありません。しかし、それらについて何かを知ることは楽しいもので、有益な方向性を与えてくれることもあります」(Immanuel Kants Werke herausgeg. Ernst Cassirer. Bd IX, S. 345)。

ここで言われている「学者世界」は、「私は気だてからして学者(Forscher)だ」(XX-44)とカントが書いている有名な箇所における「学者」とは些か意味が異なると思われる。当時の語法としては、「学者(Gelehrter)」というタームは、理性的レヴェルでräsonnierenしながら執筆活動している一群の人たちを指していたと解される。少なくとも『ベルリン月報』の編集者もカントも、その執筆者たちをそれぞれの職業に関係なく「学者」と見なしていたのは事実だ。編集者のビースターが考える学者の精神は、「私については、モーゼス・メンデスルゾーンとベルリンがもちこたえようが倒れようが構いません。ただ真理と理性が著しく危険に晒されることだけを望まないのです」(Immanuel Kants Werke herausgeg. Ernst Cassirer. Bd IX, S.306)というカントへ宛てた手紙の一節に表されている。

カントは『ベルリン月報』には一七八四年以来、全部で一五編もの論文を寄稿している。こうした運動は、彼の批判哲学の内実とも無関係ではないが、やはり時代の流行、すなわちジャーナリスティックな運動に遠くケーニヒスベルクから参加していたと見るべきではないだろうか。それは同時に「読書人世界＝学者世界」という思潮への参画を意味している。

ベルリンへの眼差しは、「読書人世界」への志向である。啓蒙主義へのカントの関心はけっして低いものではなかったが、むしろこの「読書人世界」への参与の附帯性もしくはその帰結にすぎなかったと理解すべきではないだろうか。『ベルリン月報』の執筆者たちは確かに当初から啓蒙を強く意識していたが、カント自身の心情の中には啓蒙主義という意識は彼らほど強くはなかったと言うべきであろう。実は、あの「啓蒙とはなにか」という小論以外のテクストでは、カントが自らを「啓蒙思想家」とエクスプリシットに見なしている箇所を見いだすことはできない。「啓蒙の総括者」などとも言われるカントだがこの事実は

注意すべきだ。カントの思想の中にベルリン的啓蒙や「読書人世界」という理念と結びつくなにかがあったために（後に述べるSelbstdenkenという態度）、その運動に関わったのである。

二　「読書人世界」

出版に関してカントがその次にベルリンと関わるのは「啓蒙とはなにか」である。彼はその末尾に「イマヌエル・カント、プロイセン国ケーニヒスベルク、一七八四年九月三〇日」と記している。カントはそれまで自分の書いたものをケーニヒスベルクかリガで出版している。啓蒙論文は文化的都会ベルリンへ寄稿したものであった。

『ベルリン月報』は、ビースターとゲーディケの二人が編集にあたっている。その精神は創刊号の次のような情熱のこもった「創刊の辞」に読み取ることができる。「真理への熱意、有益な啓蒙の拡大と人間を堕落させる誤謬の追放への愛、利益ある企画の確信」[113]。カントもこの精神に応えてゆくのだった。

このパースペクティヴは、通俗哲学とヴォルフ的啓蒙に相通じる方向性をもっている。たとえば通俗哲学者のクリスチャン・ガルヴェは思想をより広い公共圏の中で批判吟味すべきだという姿勢を哲学の根本に据えていたのであり、ヴォルフは自己の哲学をドイツ語でしかも平易に語るということを使命としていた（その源流はもちろんトマジウス）。

カントはガルヴェとの往復書簡の中で自己の哲学の通俗化の必要性を認めている。しかし実際はカントはそれをやらなかった。ガルヴェへの書簡から読み取れる印象では、カントは批判哲学の通俗化には真剣な関心をけっして抱いてはいない。少なくとも、著書や論文では実行していない。

しかし、カントは、大学における学者集団の枠を超えて「一般読書人」に対して自己の思想を語ることを、むしろ使命（Beruf）と見なしている（VIII-38）。すでに述べたように執筆者はすでに「学者」と見なされた。一八世紀ドイツでは約一五〇種のいわゆる道徳雑誌が発刊されたと言われている。この種の啓蒙の流行をカントは無視することはで

きない。ビースターとは仲たがいすることなく書簡のやり取りを続けていた。

ただし、すでに述べたようにカントが啓蒙そのものに対して即座に関心を示していたわけではない。また、彼の啓蒙論文の登場の背景は、カントの著作を追ってゆくだけでは理解できない。その歴史的背景は、ノルベルト・ヒンスケによれば、『ベルリン月報』一七八三年九月号に掲載された、非宗教的な結婚を指示する論文であった。[11] 匿名論文だが執筆者はビースターだと推測されるこの論文は、たいへんな物議をかもしたものであった(批判論文における匿名形式は当時の習慣の一つ)。そして、啓蒙の名のもとでそうした議論が展開されたことに対して、上級宗教局顧問官のツェルナーが「啓蒙とはなにか」という問いに対して真剣な回答を求めてきたのである。この問い自体が啓蒙的である。啓蒙運動が最も栄えると同時に、啓蒙の最後の段階になって初めて啓蒙そのものが問われたのも、啓蒙の特徴である。まさにこの問いこそ啓蒙のアルファでありオメガでもあったからだ。そして二つの回答が最も有名である。メンデルスゾーンのものとカントのものである。

啓蒙の定義は次のとおりだ。「啓蒙とは人間が自ら招いた未成年状態から脱することである。未成年状態とは、他者に導かれることなく自分の理性を使う能力を欠いていることである。この未成年状態の原因が、理性の欠如ではなく、他者に導かれずに自分の理性を使う決意や勇気の欠如にある場合、この未成年状態は自ら招いたものである。敢えて賢かれ！自分の理性を自分で用いる勇気をもて！というのがしたがって啓蒙の標語である」(VIII:35)。こうした主張は、カントが好んで用いた言葉 Selbstdenken、つまり「自分で考える」という実践的態度をその核心においたものである。しかも、それを行わない未成年状態の原因は、怠惰と臆病にあると考えられている。

さて、カントは、啓蒙の実現を促進するものとして「自由」を挙げているが、その自由を固有の仕方で二つに分けている。その区別はしばしば解釈者たちを困らせてきた。彼は、理性の使用法を、「公的使用(öffentlicher Gebrauch)」と「私的使用(privater Gebrauch)」とに分ける。啓蒙を促進するのは前者である。

理性を公的に使用するというのは、「学者として」「読者

界の全公衆を前にして」(VIII-37)理性を使用することである。逆に私的使用というのは、「自分に委託されている市民的地位もしくは公職」(VIII-37)においてなされる使用である。この使用は制限を受ける。一定の公職についている場合は、その受動的構成員としてその規律に従わなくてはならない。たとえば、カントの時代のケーニヒスベルクにはたくさんの軍人がいた。そこでたとえば、上官から或ることを命じられている将校が勤務中にこの命令が合法的か否かを声に出して議論するならば、それは非常に危険なことになり、彼はむしろその命令に従わなければならない。また市民は租税のシステムについて議論をしながらその納付を拒否することはできないわけである。

しかしながらこの同じ将校なり市民が、「学者として」命令の有効性なり租税システムの合法性を議論することは妨げられてはならない、というのがカントの主張である。これが理性の公的使用ということで、言い換えれば自説を公表する自由である。カントは「語る自由」というよりはもっぱら「書く自由」を念頭においているが、これはむしろ当時の一般的な考えであった。

また、「学者」が理性の公的使用のメルクマールになっていることが、比較的容易に受け入れられたことも注意したい。たとえば、すでにトマジウスが、「私人(Privat-Person)」が「学者」になるのに必要な学問として、実践的な論理学、修辞の学、哲学史、倫理学、国家と政治の学、宗教と教会の歴史、文学などを挙げている例がある。[110] また、一七世紀から一八世紀の転換期には、「学者」が上流階級の「教養人」と無知文盲の「非教養人」と並んで社会階層をなしていたという指摘もある。[111]「学者の資格として」の読書人によって形成される世界は、いわゆるプロフェッサーの共同体ではない。カントは「学者(Gelehrter)」といい、ゲーディケとビースターはさらに「有識者(Richtkenner)」という言葉も用いている。

理性の公的使用と私的使用というのは、同一の人物が自らの立場の相違に応じて採用してゆくものである。そしてカントはあくまでも資格にのみ固執している。その資格は、一定の団体によって公的に認められるような制度的資格ではなく、むしろ読書人が内的に意識すべきものである。彼は「個人の資格において(in Person)」という表現も

用いている(VIII-38)。本稿の「はじめに」で「人間」としてと記したのはこの意味においてである。すなわち、理性が公的に使用される次元では、その主体はすでにプロイセン国家の「市民」ではなく、「世界市民」という公人になっているのである。カントは「思考の方向を定めるとは何を意味するか」(一七八六)という論文の中で、「思考の自由は第一に市民的強制(der bürgerliche Zwang)と対立する」(VIII-144)と述べている。つまり理性の公的使用は「市民」の立場と対立するのである。ただし、こうした文脈における「私」と「公」の語法は今日のものとたいへん異なるが、けっしてまったくカント固有のものだというわけではない。

三　『学部の争い』

自らの批判哲学を構築しながら、カントのベルリンへの寄稿は続いた。そのカントにやがて大きな事件が起きる。彼の宗教論をめぐる有名な筆禍事件である。

カントは「人間の本性のうちにある根本悪について」という論文を、最初一七九二年の『ベルリン月報』四月号に載せている。この月報は発行地をすでにイェーナに移していたが、カントはあえてベルリンの検閲官庁に検閲を依頼してその許可を得た。続いて、一七九二年の六月に第二の論文「人間の支配をめぐる善の原理と悪の原理の戦いについて」を同じ手続きをとって『月報』に掲載しようとするが、今度は神学者ヘルメスの検討の結果、聖書神学の領域に属するものだという判断で印刷不許可となった。

カントは次に、すでに書き上げていた第三編と第四編とを合わせて、イェーナ大学哲学部の検閲を受け、その許可を得て、一七九三年に現在ある形にして出版した。

するとその翌年の一七九四年に国王の勅令が下される。すなわち「宗教に関して講義し著述することを以後禁ずる」ということだ。したがってケーニヒスベルク大学でこの本を講義用に使用することなどはできなくなった。これらの経過は『学部の争い』の序文によって知ることができる。一七九七年にフリードリヒ・ヴィルヘルム二世が没し、三世が王位につくと同時に検閲令は緩められたので、カントはそれを詳述することができたのだった。

さてここで、本稿で考察した啓蒙論文における理性の使用のあり方が変容されていることに気づく。実は、現実にある国家や宗教への戦い、その権力は「検閲(Zensur)」という形で行使されたのであるが、カントはその戦いの場を「学者」を成員とする「読書人世界」から、制度として規定されている大学プロフェッサーの世界へ移してやっている、と見なすことができる。以下、この問題を考察してみたい。

カントは神学部、法学部、医学部を上級学部、哲学部を下級学部として捉え、学部の争いをこの上級学部と哲学部との学説上の争いとして理解しようとしている。[一四] カントによると、上級三学部は政府から委託された文書を基礎としている。聖書神学者は「聖書」を、法学者は「国家法」を、医学者は「医師法」を基礎にして学説を展開している。そこには理性以外の別の権力が含まれることになる。

それに対して、哲学部[一五]は政府や統治者の命令を基準とするような学説には従事せず、人間に関するすべての知識を理性に基づいて取り上げることができるというのである。しかも、哲学部は自律的に、つまり自由に判断する能力である理性に従ってそれを実行する。「聖書」に対しては「純粋実践理性から展開される内的法則」に基づいて、「国家法」に対しては「自然法」に基づいて、「医師法」に対しては「人体生理学」に基づいてなしうるというわけである。こうした原則に基づいて、学部間での学説をめぐる争いが生じることになるが、当然、そこには合法的な争いと非合法的な争いとがある。

啓蒙論文における主張に戻ってみたい。カントは自由に関して理性の公的使用と私的使用ということを言っていた。この区別は『学部の争い』において展開されている立論にも当てはまるのではないか。カントは哲学部のみを自律した学部と見なしている。それに対して上級学部は、政府という後見人の命令に基づいた文書に従わなくてはならない。つまり、自らの原理が国家のサンクションに晒されるのである。したがって、彼らは理性を私的に使用せざるをえず、極端な解釈が許されるとすると、上級学部は啓蒙的には未成年状態にとどまっていることになる。

カントは、「検閲」をめぐる実質的な争い、すなわち資格としての「学者」という個人の国家に対する戦い、もし

くは個人と歴史的諸制度との戦いを、制度としての大学に移して、学部間の争いとして新たに展開させたのである。カントは、「検閲」において沈黙させられた相手に対して(カントは宗教勅令 Religionsedikt を独裁制 Diktatur とも称している)、国家から俸給をもらって(besoldet)いながらその権力的介入から守られる領域を「学問的共同体」として設立して、再度戦いを挑んでいるわけである。ディルタイなどは、下級学部と上級学部の争いを「一八世紀の学問と国家・宗教の歴史的諸制度(Ordnungen)との戦い」と見なしている。[一六]その際、一八世紀ほどドイツの大学が国家の介入を経験したことがなかったことを注意しておかなくてはならない。プロフェッサーはまず国家公務員だったのである。ちなみに、一般的にフリードリヒ二世の大学に対する貢献は低く見なされている。確かに、彼はギリシャ語やラテン語教育とともに哲学を重要視した。「古代の哲学者の論理の力、文学者の文体、ローマ・ストア派の道徳家の道徳力などは、彼にとり決して超えることのできない人間存在の最高のものであった」[一七]とも言われている。しかし彼の政策の眼目はあくまでも貴族・官僚・軍人の教育であって、本来の大学教育を目指すものではなかったのである。

このように見ると、啓蒙論文と『学部の争い』との並行関係が理解されうる。私の推測では、理性のあり方をめぐる論点では、後者は前者のもう一つのヴァージョンなのである。[一八]つまり理性の公的使用が大学という制度の中に位置づけられた場合のあり方をカントは論じているのである。カント的理性は自らの理念の実現のために制度を要求したのであった。

『学部の争い』において展開されている哲学部の位置づけに関しては、歴史的背景を考えるならばすでに一定の支持を得られるものがあった。その事情はフリードリヒ・パウルゼンの浩瀚な書物 Geschichte des deutschen Unterrichts, 2 Bände, Leipzig, 1919 に詳しい。以下でその第五章(第二巻所収、S.3-188)における叙述の中から本稿に関わることがらを要約的に記しておきたい。

一八世紀末においても、外見的には哲学部は、神学と法学と医学の上級学部における専門研究に対して、専門性をもたない予備学校(die allgemeinwissenschaftliche

Vorschule)であった。この意味ではカントによる上級学部と下級学部との位置づけはけっして非歴史的な解釈ではなく、むしろ一般的な見解であった。しかしその内実はすでに異なり、一七世紀における神学と法学の端女(ancilla)の役割ではなく、聖火走者のごとき指導者の地位を得つつあったのである。ヴォルフやカントはそうしたヘゲモニーを獲得していた。自然神学は教義や伝承を扱う際の基準を与え、それと並んで聖書の歴史的・批判的研究が地位を得てきた。法学部においては自然法が、医学部においては新しい自然哲学や自然科学が同様の傾向を示している。哲学部においては哲学的・学問的なグループと文献学的・歴史的グループとがあったが、前者が中心勢力をもつ。パウルゼンは哲学部において全面に登場してきた学科目として、形而上学、自然神学、心理学、倫理学、数学、自然学を挙げている(Paulsen, S.146)。

一七七〇年にベルリンからケーニヒスベルク大学に、哲学研究の指令(Anweisung)が送られた。神学、法学、医学のあらゆる学生に対して、それぞれの専門研究のための哲学研究の必要性が説かれたのであった。その際の哲学というのは「先入観や党派には属さずに自分で考え、事物の本性を探究する能力」(Paulsen, S.146)と見なされている。

パウルゼンは一八世紀のドイツの大学が経験した変化を次の四点にまとめている。(一)「哲学する自由(libertas philosophandi)」。すなわち、思想の自由とそれに伴い教授と学習の自由である。(二)「新哲学(die neue Philosophie)」。すなわち、スコラ的哲学に対して、新しい学問が、特に天文学と物理学がとって替わった。(三)「新人文主義(der neue Humanismus)」。たとえば講義においてはスコラ哲学の書物が古くさくなり、新しい教科書が登場してくる。プロフェッサー自身が教科書を執筆するようにもなった。(四)「ドイツ語(die deutsche Sprache)」。よく知られているように、ラテン語に替わってドイツ語が講義の言葉として使用されるようになった。

以上のようなパウルゼンの報告の一部を見るだけでも、一八世紀における大学のあり方が哲学を中心に大きな変化を遂げつつあったことが伺える。カントは自らの大学論を叙述するにあたり、もちろんその指導的位置にあったのであるが、けっして時代の革命的論者であったのではなく、

むしろ時代の精神的状況を原理に基づいてその核心から展開したのである。言い換えれば、時代の先行的代弁者だったのではないだろうか。そしてそのすべてにおいて統べている原理は「自分で考える(Selbstdenken)」という、カントの啓蒙思想に通じる実践的態度である。そしてこの格律もまた啓蒙主義的態度であった(VIII-146)。

「自分で考える」という態度と相即する「哲学する自由」は、カント以上にヴォルフが好んで用いたものである。彼の次の言葉には、カント哲学の源泉や啓蒙思想との関わりを十分読みとることができる。「我々が哲学するかぎり、我々に真と思えるものや偽と思えるものを公に語ることが許されているか、あるいは、他人にとって真と思えるものをあたかも真のごとく擁護することだけが許されているかのいずれかである。誰でも認めるように、前者の場合に我々は哲学する自由(libertas philosophandi)を行使しており、後者の場合いかなる自由も残されていない。したがって「哲学する自由」とは、哲学的諸問題に関して自らの意見を公にすることが許容されていることである」[一九]。

ここには「自分で考える」という態度だけでなく、明らかに、「公に語る」というカント的啓蒙思想がすでに宣言されている。カントの場合は、Schriftを通して語るということに力点があった。そしてそれはむしろガルヴェなどに代表される通俗哲学者たちの手法にほかならない。しかしながらカントは『宗教論』の筆禍事件を通して、そのあり方を大学という制度の中に、特に哲学部において新たに確立すべきだと主張しているのである。言い換えれば、「自分で考える」という精神的態度を、一八世紀の大学が経験しつつある哲学へのオリエンテーションを踏まえつつ、啓蒙思想を超えて、さらに理性の原理に基づいて大学の中に制度的に展開したのであった。それはまた、ゲーディケやビースターが求めたような一般読書人の世界の確立ではないであろう。カントは狭義の学者世界の確立を目指したのである(しかしそれはまたインターナショナルなものであった)。そこには「文芸共和国」の理念を伺うことができる。次にこの点を考察したい。

四　「読書人世界」から「学者共和国」へ

啓蒙論文では「読書する公衆」「読書人世界」が問われた。そこでは「学者」という抽象的資格、具体的にはSchriftstellerの資格が問われた。その場を提供するのは主に『ベルリン月報』のような啓蒙雑誌であった。カントは『月報』を通して積極的に当時の「読書人世界」に働きかけたのであった。

ここには理念として二種類のゲゼルシャフトが控えていると思われる。すなわち、「学者共和国(Gelehrten-republik)」と「ゾツィエテート(Sozietät＝結社)」とである。前者は、「文芸共和国(république des lettre)」という、学問・芸術を愛する者たちがエピストラ(書簡)を介して連帯意識をもったいわば見えざる共和国の理念の、一八世紀ドイツ版と見なすことができる。その国境なき市民は知的好奇心に駆られて学問や芸術上の交流を行うことを旨とした教養人たちである。たとえばピエール・ベールは、Nouvelle de la République des Lettre(一六八四―八七)という雑誌を発刊して学術交流を広く一般読書人に求めた。ドイツでは「文芸共和国」の理念は「学者共和国」という表現をとって、スコラ哲学や神学から学問を解放しようとしたトマジウスがその先鞭をつけている。この共和国においては理性だけが統治し、国家権力も教権もそこには介入すべきではなく言論の自由が守られるべきであることが主張されている。(一二)

ドイツの「学者共和国」の理念を具体的に支えるのは、ベールにおけるのと同様にもはやエピストラではなく雑誌であり、それを発刊するゾツィエテートである。ゾツィエテートの伝統は一七世紀に見ることができるが、一八世紀にその数を膨大に増やしている。デュルメンは一八世紀の主なゾツィエテートをAkademien und Gelehrte Gesellschaften, Literarische Gesellschaften (Deutsche Gesellschaften), Patriotisch-gemeinnützige Gesellschaften, Freimaurer-Logen, Lesegesellschaftenに分類していて、総数八三三のリストを紹介している。そのうち代表的な読書会(Lesegesellschaft)は二五〇である。(一三) ライプニッツによるベルリン・アカデミーのような学者組織と、ゴットシェットにおけるdie Leipziger Deutsche Gesellschaftのような文学組織などは、一八世紀に起きた新しい動きである。

「学者共和国」の理念はもちろんのこと、ゾッィエテートも非政治的なもう一つの独立した政体(Etat)を形成しようとするものであり、両者においてはそれぞれ自ずと二種類の成員が登場することになる。つまり「普遍的に法を執行する市民社会」(VIII-22)における「市民」と、もう一つの独立した見えざる共和国の成員とである。つまり同一の成員が立場を替えて両者に属するのである。カント(『学部の争い』)においては、「公衆(Publikum)」は「市民的公共体(das bürgerliche gemeine Wesen)」と「学問的公共体(das gelehrte gemeine Wesen)」とに分けられていた(VII-34)。この後者の公共体の中に形成されるのが「読書人世界」でもあった。そして「読書人世界」の成員が学部に属するとき、単なる見えざる共和国の成員ではなく、制度的に「学問的公共体」に属することになる。(二二)

カントの議論では、「学問的公共体」と「市民的公共体」との共存が説かれているが、同一成員における精神的葛藤という問題が捨象されているわけではない。私たちは両公共体に同時に属するという可能性が十分ある。この問題は啓蒙論文における理性の公的使用と私的使用の区別に通じるものだ。そしてそれはカントにおけるdouble-thinkingの問題として古くから論じられてきた。(二三)

しかしdouble-thinkingの立場はむしろゴットシェットが一七四五年に書いた次の文章にはっきりと見られる。「学者はある国の市民かつ住民ではなくただ学者としてのみ考えられる限り、世界の最強の君主たちと同じように自由である。(……)。この自由は自分が住んでいる国家に損害を与えるようなことを何も公に示したり書いたりしてはならないという限りでの制限を受けることは、否定することができない。しかしこの制約は、一人の学者としてではなく、公益を無視してはならない義務を負う国家の一市民として甘受するのである。もしこの国にいないのならば、その人の自由はこの点で制限を受けることはないだろうが」。(二四)ゴットシェットもカントと同様に思想の表明の自由ということに論点をおいているが、デュルメンが指摘しているように、彼は学者の精神的な独立性を要求しても政治的隷属性には触れないようにしている。(二五)したがって、国家(政治)、宗教(教会)がテーマ化されることはなく、そこにはカントにおけるような衝突(筆禍事件)も、個人的

な葛藤も生じてくる余地はまったくない。カントはむしろ、その啓蒙論文においては宗教と立法の問題を重要視し、また大学論においては神学部と法学部との合法・非合法的な争いを先鋭化しており、さらに書籍の審判者としてたとえば僧職者に対する学者の優位を論じている(VI-8)。

カントの「学問的公共体」という共和国においては、上級学部は議会の右翼として、下級学部はその左翼＝野党と見なされており(VII-35)、フランス革命以後の議会における位階組織の理念が導入されている。右翼は政府の条令を支持するが、真理が問題となる自由な体制においては野党すなわち哲学部がなくてはならなくなる。前者は保守であり、後者は革新である。[二六] いずれにしても、大学は国家やラントとは別の共和国として位置づけられる。しかもそれは、読書会や「読書人世界」が形成するような公共性(Öffentlichkeit)とは異なり、制度(Institutionen)として一定のハード(講義棟、図書館、その他)をもつことになる。

制度としての大学は、ゼルバッハによれば、国家と教会につぐ第三の権威(Autorität)であり、理性の制度的相対物(Pendant)である。[二七] それは言い換えれば、制度化された「学者共和国」ではないだろうか。カント的理性はこの意味で大学において保護されることになる。カントによって大学は理性の一つのあり方として基礎づけられたのだ。[二八] では、カントのこの作業はドイツの大学の歴史においていかなる意義を有しているのであろうか。

周知のように、Universität の語源の universitas は、Kollegium と同様に「団体」とか「組合」を意味していた。一二世紀にイタリアとパリで大学が創設されたとき、この言葉は「教師と学生の組合(universitas magistrorum et scolarium)」という形で用いられていた。この自治的組織は、シェルスキーによれば「その社会的、法的、そしてとりわけ精神的自立を土地の教会権力や都市権力の干渉・侵害から守るために、これらの権力よりもさらに上位の政治権力、すなわち皇帝や教皇に保護を求めた」。[二九] それは社会的には異分子的存在であり、制度的には法人団体(Korporation)であった。[三〇] それに対してドイツの大学は「イタリアやフランスのそれとは対照的に、当初から領邦君主を創設者とした王制当局の営造物、または、せいぜい都市の営造物として発生」し、「一層強い官憲の監督と指導の

もとに置かれていた」[31]。このことはすでに見たようにバウルゼンも指摘している。しかしこうしたドイツ的体制においては（すなわち、苦労して上位の政治権力の保護を獲得する必要がなく、設立の当初から獲得していたのである）、当然のことながら中世的大学がもともと有していたuniversitasの原理が制約を受けることになる。

ヨーロッパの大学は、そもそもがuniversitasの原理と政治的原理との緊張関係の中で栄枯盛衰してきたのである。そしてドイツでは領邦大学としての性格を強くもち、職業教育の機関と見なされ、カントの言葉では「政府の道具」(VII-18)としての聖職者、法務官、医者が教育されていた。しかも、一八世紀のドイツの大学は最も危機に瀕した。すなわち、実用主義が猛威を振るい、一七六〇年以降に大学廃止運動が盛んになった[32]。すでに指摘したように、一方で現象として大学内部では哲学部の台頭が見られた。しかしまた他方では、大学の専門学校化が通俗的啓蒙主義者たちによって唱えられていた（そしてこれは、後の世紀のドイツにおける啓蒙主義の一つのイメージである）。カントが行ったことは、時代が求めていた有用性の原理（それは政治的原理と結託していた）に対して、その核心部分に哲学部をおいて真理の原理（それはuniversitasの原理に内在していた）を対置させたことであり、さらにそれを制度として第三の権威に位置づけて政治的原理からの特別保護区域を形成しようとしたことだ。もっともそれは単に保護されるだけでなく、「すべての学説をとりあげる権利」(VII-28)を有して、政府に「忠告(Beratung)」し、いつの間にか哲学部が上級学部になることが予想されている(VII-35)。

しかしながら、これは啓蒙論文における理性の射程であった「読書人世界」が、制度という制限を受けて成立しうるものである。カントがケーニヒスベルクからベルリンに思いを馳せて参与しようとした「読書人世界」は、宗教＝政治に関わることによって掣肘を加えられ、政治的原理と一定の妥協をすることにより保護を獲得しなければならなかった。大学が国家の良心となる可能性も、学問の単なるサンクチュアリーとなる可能性も、すべてこのカントの議論に基づいているのではないだろうか。

※本文中のカントの著作からの引用箇所及び参照箇所は、『純粋理性批判』を除き、アカデミー版の巻数とページ数で示す。

注

（一）カントはヘルダーやハーマンなどに批判されるだけでなく、いわゆる啓蒙の定義の多くがカントに帰せられているにもかかわらず、一七八一年の『純粋理性批判』出版以後、メンデルスゾーン、エーバーハルト、ニコライなどの啓蒙主義の代表者たちとも訣別してゆく。この点はカントと啓蒙主義を論じるときに見逃してはならない事態である。ノルベルト・ヒンスケ『現代に挑むカント』石川・小松・平田訳、晃洋書房、一九八五年、三五ページ以下参照。

（二）社会学者のリンガーによれば、ドイツの知的伝統の主潮流は一貫して（英仏流の）啓蒙主義に対する反発として描かれているが、カントは啓蒙主義の名付け親であるにもかかわらず批判されていない。ドイツの知識人が本当に嫌ったのはあらゆる知識に対する通俗的な態度であり、直接役に立つ知識への志向だというのである。フリッツ・K・リンガー『読書人の没落――世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』西村訳、名古屋大学出版会、一九九一年、五三～五四ページ参照。

（三）エンゲルハルト・ヴァイグル「カント――ケーニヒスベルクの空」（『思想』岩波書店、一九九五年七月号）参照。

（四）エンゲルハルト・ヴァイグル「カント――啓蒙のメタ批判」（『思想』岩波書店、一九九五年九月号）参照。

（五）ここに引用されたフリードリヒ二世の言葉は次の論文の中で引用されているものを訳出したものである。Malter, R.: Königsberger Gesprächskultur im Zeitalter der Aufklärung. Kant und sein Kreis. In: Norbert Hinske, Hg. *Kant und die Aufklärung*, Meiner, 1992.

（六）Vgl. Friedrich der Große und die Philosophie, Texte und Dokumente, Reclam, 1986, S.27-28.

（七）ケーニヒスベルクがアリストテレス主義の牙城となっていった発端は、Hartwig Wichelmann（一六一二～四七）が一六三八年にマギスターとなり、一六四六年にはギムナジウムの校長となってアリストテレス哲学の解釈者として活躍し始めたことである。Vgl. M. Wundt, *Die deutsche Schulphilosophie im Zeitalter der Aufklärung*, S.117f.

（八）アリストテレス主義とピエティスムスとヴォルフ主義との関係については次の論文が有益である。福谷茂「カントと〈形而上学の戦場〉」（浜田義文編『カント読本』法政大学出版、一九八九年）。

（九）Vgl. Alfred Voigt, Gesetzgebung und Aufklärung in Preußen. In: *Zeitgeist und Aufklärung*. Ferdinand Schoeningh-Paderborn, 1972, S.142.

（一〇）Norbert Hinske, Hg. *Was ist Aufklärung? Beiträge der Berlinischen Monatsschrift*, vierte Auflage, Darmstadt, 1990, S. 3.

（一一）Norbert Hinske, ebd. の Einleitung を参照。

（一二）赤沢元務「Chr. トマジウス――一六八七年の講義案内書――」（千葉工業大学研究報告人文編第二四号、一九八七年）による。

（一三）マックス・フォン・ベーン『ドイツ十八世紀の文化と社会』三修社、飯塚他訳、一九八四年、二ページ。

（一四）カント自身はこの区分を「一般的慣習に従って」（VII-18）いると述べている。

（一五）「哲学部」に属する学科（Departement）としてカントは、歴史、地理学、学的言語学、人文学、純粋数学、純粋哲学、自然と道徳の形而上学を例として挙げている（VII-28）。日本語では、むしろ「文学部」と訳すべきかもしれない。

（一六）Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Band IV, 6. Auflage 1990, Vandenhoeck & Ruprecht Göttingen und Zürich, S. 308.

（一七）ディルタイ『フリードリヒ大王とドイツ啓蒙主義』村岡訳、

創文社、昭和五〇年、一一九ページ。

（一八）この点については、拙論「カントの啓蒙思想と大学論」（『社会哲学の領野』晃洋書房、一九九四年）参照。

（一九）『学問的方法で論じられ、もろもろの学問や人生の用に役立つ理性哲学ないしは論理学』山本・松家訳、神戸大学大学院文化学研究科「文化學年報」第一五号、一九九六年、一三一ページ）

（二〇）トマジウスの「学者共和国」については次の論文を見よ。赤沢元務「Chr.L.Liscow 研究・序」（千葉工業大学研究報告人文編第二八号、一九九一年）。

（二一）Richard van Duelmen, *Die Gesellschaft der Aufklärer*, Fischer, 1996 の巻末のリストによる。

（二二）ドイツ語の das gemeine Wesen は Republik と同義語である。

（二三）Norbert Hinske, ebd. S.530f.

（二四）この引用は、Duelmen の著書（ebd. S.52）におけるゴットシェットからの引用による。

（二五）Duelmen, ebd. S.52.

（二六）Vgl.Reinhard Brandt, Zum »Streit der Fakultäten«. In: *Kant Forschungen, Band 1*, Felix Meiner Verlag, 1987, S.37.

（二七）Ralf Selbach, *Staat, Universität und Kirche, Die Institutionen- und Systemtheorie Immanuel Kants*, Peter Lang, 1993, S.194./Ralf Selbach, Instituitionen als Systeme, Kants Konzeption von Staat, Universität und Kirche. In: *Allgemeine Zeitschrift für Philosophie*, Friedrich Frommann Verlag, 1994, Heft 1.

（二八）しかし、理性がこうして保護されるということは、理性自らの制限もしくは縮小化ではないだろうか。カントの歴史的コンテクストとは独立に、ヤスパースはその事態を次のように言い表している。「大学は制度としてのみ世界のなかに存立する。大学の理念は制度においてその身体を得る。身体はそこに理念が実現される程度に応じて、その価値をもつ。身体は、理念がそれを見放すとき無価値になる。しかも凡ゆる制度は、理念に弾力ある順応と制限の余地をあたえなくてはならない。理念は決して〈理想〉のかたちに具象化されることはなく、あくまでも運動しつづけるのである。したがって大学には、理念と、制度的・団体的現実化のもつ欠陥との間に、不断の緊張がある」（『ヤスパース選集』II、森訳、理想社、昭和三〇年、一三七ページ）。

（二九）シェルスキー『大学の孤独と自由』田中・阿部・中川訳、未来社、一九七〇年、一八ページ。

（三〇）シェルスキー、同書、一九ページ。

（三一）シェルスキー、同書、二一ページ。

（三二）シェルスキー、同書、三六～四九ページ。

Der eigentliche Endpunkt von „*Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*"

Toshio NENOHI

Der Ausgangspunkt der „*Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*" ist bekanntlich die Tathandlung. Und in Hinsicht auf ihren Endpunkt nimmt man allgemein an, daß die hauptsächliche Erörterung des Werkes schon im §*5* zum Schluß kommt, während die folgenden sechs Paragraphen nur das System der Triebe darstellen. Aber Fichte erwähnt am Anfang des §*6* eine Metaphysik und eine ursprüngliche Realität. Das bedeutet, daß es sich von nun an um diese Themen handelt.

Indem er in §§*6,7* und *8* das Streben, den Trieb und das Gefühl erörtert, zielt Fichte oder das betrachtende Subjekt im §*9* auf die Vereinigung mit dem betrachteten Ich. Dabei fühlt das letztere sich durch das Nicht-Ich begrenzt. Gerade da liegt der Grund aller Realität, und dieser ist nichts anderes als die ursprüngliche Realität, die Fichte in diesen Paragraphen zu erreichen strebt. Hier findet nun die „*Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*" ihren eigentlichen Endpunkt.

Und von diesem Punkt ist die Wissenschaftslehre 1801/02 nicht so weit entfernt. Denn das Ich der ersten Wissenschaftslehre ist schon „für sich für sich selbst" und „geschlossen" da. Diese Begriffe drücken bereits den Standpunkt der letzteren aus.

Von der Leserwelt zur institutionalisierten Gelehrtenrepublik -Kants Versuch, die Vernunft zu institutionalisieren-

Kiichiro FUKUDA

Kants Abhandlung *Was ist Aufklärung?* wurde in der *Berlinischen Monatsschrift* im Jahre 1784 veröffentlicht. Sie war eine der leitenden Zeitschriften der deutschen Aufklärung im 18. Jahrhundert. Zeitschriften spielten damals eine sehr wichtige Rolle zur Entwicklung der sogenannten „Leserwelt" . Auf gleiche Weise wurde auch eine Welt der Öffentlichkeit geschaffen, in der Philosophen, Denker, Anhänger der Aufklärung etc. als Schriftsteller zu „räsonnieren" und ihre Meinungen frei zu äußern versuchten. Die Autoren der Zeitschriften wurden auch für Gelehrte gehalten. Kants Schriften in den Zeitschriften repräsentieren seine Absicht, an der „Leserwelt" teilzunehmen und diese zu entwickeln. Kant begründete nicht nur seine kritische Philosophie, sondern schrieb auch viele Beiträge zur *Berlinischen Monatsschrift*. Königsberg, wo Kant sein ganzes Leben verbracht hat, war eine große, aber abgelegene Stadt, was die Aufklärung

betrifft. Im Vergleich damit war Berlin ein Zentrum der deutschen Aufklärung. Kant stand in regem Briefwechsel mit Schriftstellern, Wissenschaftlern und Aufklärern in Berlin.

Seine Schriften über die Religion erschienen auch in der Monatsschrift und wurden später als *Religion innerhalb der Grenzen derbloßen Vernunft* publiziert. Aber sie wurden am Anfang von der Obrigkeit unter dem preußischen Absolutismus zensiert und seine weiteren religionswissenschaftlichen Abhandlungen schließlich verboten. Im Anschluß daran versuchte er im *Streit der Fakultäten* (1798), seine Idee von der Universität zu begründen; er stellte den spezifischen Standpunkt der philosophischen Fakultät fest. Er behauptet hier, daß es eine andere Republik an der Universität geben kann. Diese von der politischen Macht (Zensur) freie Republik kann seiner Theorie nach als eine andere Seite der aufklärerischen Vernunft ausgelegt werden. Die „Leserwelt", deren Mitglieder die Vernunft frei und öffentlich gebrauchen können, beschränkt sich bei Kant auf die Universität und verändert sich zur institutionalisierten „Gelehrtenrepublik". Die Universität wird bei ihm neuerdings als Institution der Vernunft gezeigt.

De la distinction de l'amour chez Descartes

Seiji MUTÔ

Alors que Descartes a déclaré, dans la lettre dont l'adresse nous reste inconnue (peut-être au P.Mesland) (AT.IV-348~50, 1645 ou 1646?), que *l'amour*, la haine, l'affirmation, le doute, sont de véritables modes dans l'esprit, il a affirmé, dans *Les Principes de la Philosophie* (AT.VIII-1-23, *Pr*.I-48), que *l'amour*, ainsi que la colère, etc., ne doit point être attribué à l'âme seule, ni aussi au corps seul, mais à l'étroite union qui est entre eux.

Si nous jetons un coup d' œil sur ces deux textes, nous remarquerons qu'il y a la contradiction manifeste entre eux. Car le même mot d'amour est à la fois employé comme mode étant attribué seulement à l'esprit, et comme émotion prenant sa source dans l'union de l'âme avec le corps .

Ces opinions contradictoires nous semblent disparaître à l'aide de la distinction de l'amour que Descartes a proposé dans la lettre bien connue à Chanut du 1er février 1647 (AT.IV-600~17). Mais, comme nous le verrons ci-après, cela n'est pas simple. Car Descartes a établi d'autres distinctions de l'amour, par conséquent si l'on n'examine pas la relation réciproque entre elles, on ne pourra suffisamment comprendre les réalités de l'amour qu'il veut décrire.

Pour examiner la différence entre ces deux amours dont nous avons parlé ci-dessus,